

心や(い)みち

.... 被災地支援情報



震災から8年を終えて
それぞれの1・17が始まった

第74号 発行日 2003.2.18
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)



昨年の1月17日は、一昨年に起こった「9・11」とその後の米英軍によるアフガニスタンへの空爆の後遺症がまともに残っている状態で迎えました。

今年の「1・17」については、少しは穏やかに過ごせるだろうかと思っていたら、昨年末からアメリカによるイラクへの攻撃が現実のものとなるようなニュースが飛び交い、毎日イライラする日々が続いています。

さて、今年の「1・17」はこれまでと違って、私たちのこの被災地NGO協働センターの事務所からスタートしました。午前5時46分、庭に建立されている観音様の前でスタッフ一同が阪神・淡路大震災の犠牲者に対して追悼供養をするとともに、アフガニスタンやパレスティナ、イスラエルの犠牲者への追悼をし、イラクに再び悲劇がもたらされないようにお祈りしました。「1・17の灯り」が平和への灯りへつながっていく1ページがめくられたように感じました。

私たちは、あの「9・11」からずっと、「いま、私たちにできることは」と問い合わせてきました。その中で気がついたのは、「この被災地では、まったく同じ問い合わせを、震災後2年くらいしてから持ち続けてきた」ということ。地震に強いまちづくり市民主体のまちづくり一安心・安全なまちづくりと、この問い合わせを掘り下げていく中で行きつくところは、結局「平和」なんだということが理解されてきました。しかし、その「平和な社会」を、誰が築いていくのかということが置き去りにされてきたばかりに、残念ながら世界中で悲劇が繰り返されている。私たちは、震災5年目くらいから「担い手は誰なんだ!」という議論を真剣にし始めました。そのためには自分と向き合う作業を避けて通れないことが判りました。担い手づくりというのは、「いま、私に何が

できるのか?」を問い合わせることだったのです。

アメリカの有名な言語学者ノーム・チョムスキーは、「どうすれば、戦争は止まりますか?」という問い合わせに対し、「そんなこと簡単なことだ。戦争に参加しないことだよ」と言い切っています。阪神・淡路大震災を体験した被災地からの最大のメッセージは、「防災とは、(最大の人災である)戦争が起きる前に止めること」ではないでしょうか?

当被災地NGO協働センターは、今年度の事業内容を総会で承認頂いたとき合わせて強調したことは、「この被災地のNGOとして、最も大事な活動は提言活動」でした。

今年、1月18日の「イラク戦争NO!連帯市民投票」行動に被災地NGO協働センターとして組織決定をし、被災地を中心に呼びかけ団体の一つとして広く関係者に発信したことは、ある意味これまで最大の提言活動ではないかと認識するようになりました。

震災後、国内外の災害に係わってきているNGOとして、「防災とは、戦争が起きる前に止めること」ということに、ごく当たり前のことではあるが気づいたことは大きな前進だと思います。でも、この戦争という災害は、ホントにいま、止めなければなりません。

自然災害は、ほとんどが止められないことが多いのですが、戦争という人災は止められるのです。

みなさん、どうか被災地からのこのメッセージを受け止めて下さい。

そして、もうしばらく被災地を見守って下さい。心からお願い申し上げます。

(被災地NGO協働センター代表 村井雅清)



国際ワークショップ2003 地震にまけない世界に向けてⅢ ～ひと・まち・きずな～

2003年1月30日から2月1日まで3日間にわたって開催された国際ワークショップに、CODE（海外災害援助市民センター）が実行委員会の一員として運営に携わった。このワークショップはUNCRD（国際連合地域開発センター防災計画兵庫事務所）が毎年行っているもので、今年で3回目になる。これまで小規模で行われていたのが、今回は初の試みで読売神戸ビルの大きなホールを使用することになった。

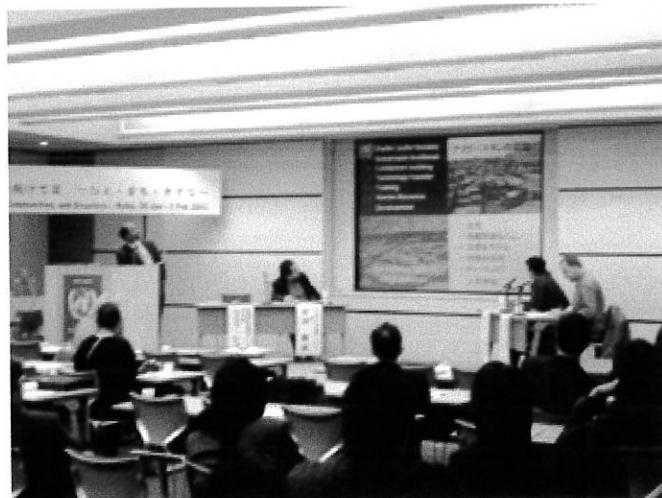
ワークショップ第1日目は、関係者によってUNCRDが行っている「持続可能なコミュニティベースの防災」プロジェクトの成果について討議された。

2日目は一般にも広く開放し、「コミュニティの持続性」についてシンポジウム形式で行われた。ここではまず「災害とコミュニティ」としてアジア6カ国で現在行っているプロジェクトの成功事例の報告があり、「市民とコミュニティ」の役割について阪神・淡路大震災やバングラデシュ・太平洋地域の経験から述べられ、「災害と教育」については舞子高校の生徒の発表や、ひょうごからインド・グジャラートへ送られた義援金で再建された学校の報告などがあった。午後には、「市民主体への挑戦～神戸から世界へ～」と題してパネルディスカッションが行なわれ、神戸と日本・世界各地から防災活動に従事しているパネリストを呼んで討議が行われた。

最終日はAFGHAN DAYで、一日中アフガニスタンの復興に関する内容であった。アフガニスタンから防災大臣、住宅都市計画省副大臣、女性課題省の方をお招きした。また、ピースウィンズ・ジャパンの活動報告、CODEが現在取り組んでいるアフガニスタン復興プロジェクトについても話し合われた。パネルディスカッションでは、アフガニスタンの明るい未来にむけた復興について質問を交えていくつの具体的な意見がでた。最後にアフガニスタンのドキュメンタリー映画「よみがえれカレーズ」の土本典昭監督による1985年撮影の未公開フィルム「よみがえれカーブルの人々」を上映、その後監督の対談があり、貴重なお話を聞くことができた。

このワークショップを成功させるために、兵庫県下の大学をまわり、学生の参加を広く呼びかけた。実際に大学をまわって肌で感じたことは、学生たちの世界に対する意識の強さ、熱意、そして話を理解する柔軟な心である。それから、顔の見える距離にいることの大切さを強く感じた。今の時代、電話やメールで簡単に連絡がとれるが、あえて出向いて話す。そこで相手の表情がわかり、反応を感じ、そこからまた新しい道が開けることもあると実感した。顔の見える距離をこれからも大切にしていきたいと思う。

ワークショップの話に戻るが、アフガニスタンは以前よりも良くはなったが、まだまだ混沌としている。「過去23年の紛争を経て人々は気力を失っている」ということばにあるように、命をおびやかされる不安定な暮らしが与えたものは計り知れない。子どもたちは生まれてから紛争やタリバン統治の世界しか知らない。暫定政権は、女性の自立と社会進出をうたっているが、長い歴史によって根づいた



封建的なイスラム社会を変えていくにはまだ時間がかかるだろう。アフガニスタンの女性との話の中で、「車や物は奪われてしまったけれど、命はある。命があるから行動できる」ということばが印象的だった。彼女がとても強く思えた。今は本当に大切なことがわかりにくくなっているような気がする。もう一度シンプルになってみようと思った。

ワークショップの中で、防災が平和につながるという意見があった。その考えはとても斬新で、でも当たり前のことだなあと素直に思えた。日常生活でわたしたちにできることはたくさんある。まずは気づくこと、ひとりひとりが意識をもって生活することがわたしたちにまずできることではないかなと思う。

（海外災害援助市民センター 土居ゆき）

◆国際ワークショップに参加して……

この日、アジア各国から、さまざまな災害経験をした方々や、災害に関連した各分野の人たちが会場に訪れ、たくさんの議論が交わされました。防災や減災を考える上で、災害という非日常的な事柄として、捉えがちですが、それらの事柄を追求していくと、普段の何気ない私たちのくらしの行為などが、災害時に役に立ったり、防災や減災につながります。例えば、発展途上国での防災や減災を考えるとき、まずは貧困という解決しなければなりません。参加者からも「国際協力をするとあたって、まず飢えている人のお腹をいっぱいにすることが、最大の使命だ」と発言がありました。そのために、私たちは先進国の人々が自分たちだけの利便性や利権だけを求めているライフスタイルを見直し、構造的な暴力をなくすための行動をはじめなければならないときがきているのです。

室崎教授からはそれは「平和の追求」につきると……

このワークショップを終えて、改めて「平和」というものの大切さを感じました。「平和ボケ」した日本でも、知らないうちに戦争や環境、貧困などの問題に間接的に関与していることを認識し、地球市民として本当の意味での「平和」を追求することが急務の課題なのでしょう。それが防災や減災にもつながるのだと……

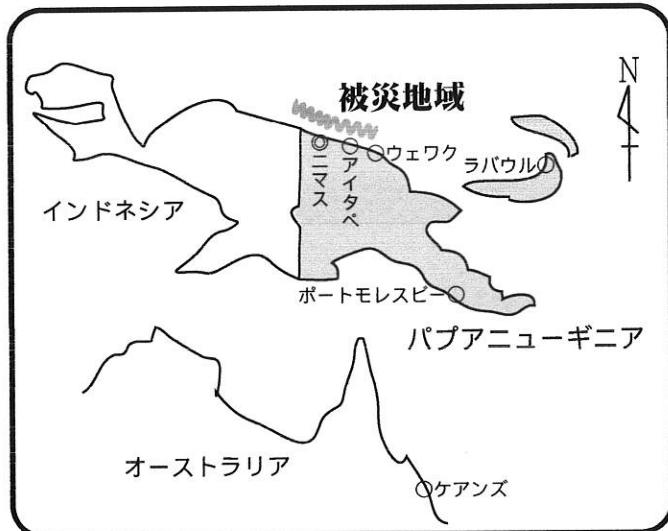
（被災地NGO協働センター 増島智子）

被災地
の現場
から

パプアニューギニア報告

2003年1月訪問 (1998年7月17日地震津波被災地)

被災地NGO協働センター 鈴木隆太



2003年1月4日から15日にかけて、1998年に津波による大きな被害を受けた被災地・パプアニューギニアを訪問した。

今回の目的は、被災した村に建設し、2000年に完成した学校を視察し、その村への追加支援を行うこと。また、2000年に亡くなられた草地賢一さんが最後に踏まれた被災地に、夫人のとし子さんと長男の大作さんをご案内することだった。

現地への道のりは非常に長かった。予定では、1月8日に飛行機で被災地に一番近い空港があるアイタペという町まで行き、そこからボートで被災した村を訪問することになっていた。しかし私たちがポートモレスビーを出発する前日の大雨で、未舗装の空港はぬかるんで閉鎖。飛行機は手前の町ウェワクに降り立った。そこから車での移動に切り替える予定だったが、ウェワクからアイタペの途中にある川（橋が架かっておらず、通常時は車がそのまま川の浅いところを選んで渡っていく）も車が渡れない、という状況に陥り、ウェワクで他の方法を模索することになった。

結局車での移動を断念し、小さなボート（荷物を載せない状態で大人8人くらいが限度）で海原を海岸線に沿って走っていくことになった。このボートをチャーターするためにはピーター氏は町中を奔走してくれたのだが、ウェワクを出発できたのは、到着してから3日目の早朝だった。

ウェワクからアイタペへは、海岸線を西へ向かうのだが、日が昇ると西からの風がきつくなるため、早朝5時に出発した。しかし、この時点ですでに海は大時化。波の上を飛び跳ねるようにして約4時間、ようやくアイタペに到着する。

ここで2時間ほど休憩をとりながら、買い物を済ませ、再びボートで目的地のニマス村へ。アイタペからはおよそ2時間。再び高い波にもまれながらの船路となる。太平洋に出て、海岸線沿いに西へ1時間ほど向かうと、大きな入り江がある。そこが1998年の津波で大きな被害を受けた「シサノラグーン」だ。ここには2,000人以上の方々が犠牲になって、そのまま大きなお墓になっているという。

この入り江から、支流を上っていく。途中カヌーのよう

な小さな船に乗って釣りをしている人たちを見かける。あいさつをすると、みんな快く返事を返してくれる。1998年の12月に来たときは、ここにはまだ津波の被害の残骸などが残っていた。あれから3年。当時倒れていた木々や、傾いた小屋などではなく、立て替えられた家なども見受けられた。

「ここにはまた誰か戻ってきてるの？」と訊ねると、「いや、誰もここには住もうと思っていない。ここにある小屋は、上流から降りてきてここで釣りをしにくる人たちのための小屋で、釣りをし終わったら、みんなまた上流の村へ帰っていく」という返事だった。

このシサノラグーンからはだいたい1時間ほど。蛇行した川をひたすら上っていくと、そこにニマス村がある。

◆村に到着

川沿いにある村に到着すると、すでに村の人たちが待機してくれていた。船から下りると、まず顔にペイントをされ、両脇に女性がついて、村の中心部までダンスをしながら私たちを導いてくれる。顔はやけどに近いくらいの日焼けのため、ペイントがヒリヒリとしみる。

村の人たちは私たちの姿を笑顔で迎えてくれ、笑いながら、踊りながら建設されたニマス・コウベメモリアルスクールへ。そこに村の人たちが集まって、あいさつをし、私たちもスピーチをさせていただく。

その日の午後は、自由時間となり、それぞれ村を見て回ったり、休憩を取ったり。翌日には草地大作さんはポートモレスビーに戻らなければいけないため、学校などを見学されていた。

その日の晩から翌日にかけて、外では人々が歌を歌い続けていた。それは、大作さんが日本に無事に戻れるようにという祈りの歌だった。

翌日早朝、大作さんは船で帰路に就いた。

◆村人ととのミーティング

到着翌日に、私たちはミーティングを行った。津波で被害を受けた人々への追加支援を行うため、どのようなニーズがあるのかを村の人々から聞くためだ。

ここには学校建設の支援を行い、すでに建設は完了した。その後パプアニューギニア政府から、被災した生徒に対して、無料で学校へ通える特別措置が2年間あった。しかし、今はそれが終わり、財産の多くを津波で失い、仕事もない状況でなかなか学校へ通うための資金がないという。

そのため、学校の教育費として支援金を使用してもらうことを合意した。

◆村の農業

このニマス村では、いま様々な課題に直面している。津波による被害で、海沿いにあった村から移住した。移住先は、以前から畠として使用していた彼ら自身の土地で、現在28グループ、約1500人の人々が住んでいる。28のグループというのは、各家族（親族を含む）が一つのグループを形成しており、一つのグループに約4~5世帯が生活しています。

この村は年々広がっており、今後、道（人が通れるくらいの小道）を少しずつ整備していくとのことだった。

この村では主に、バニラやカカオ、ピターナッツ（喫みタバコのようなもので、ナツの一種類と思われる）などを栽培し、それらを売って収入をしていると同時に、被害を受けた海岸沿いにある旧居住地（この村の名をウイポン村と呼ぶ）では未だにココナッツの栽培をしており、時折ウイポン村まで降りてはココナッツを採取している。

このウイポン村へのココナッツ狩りに私も参加させてもらったが、村は大きな何もない広場がところどころに点在し、場所に被害に遭われた方への鎮魂よっては大きな十字架が立てられていた。

「ここは本当にきれいな村だった。」と語るのは、この村の出身者であるケイシャン・サロヤ氏。彼のお父さんはこの津波によって被害に遭い、結局行方不明のままだという。

「私の家族の家はこの村にあった。津波が来たときは、兄弟はすぐに船で避難したが、父は逃げ遅れ、今でも見つかっていない。母は運良く瓦礫になった家の中で助かった。この辺り一帯は100人以上の死体があった。」

彼は、いずれ大きな十字架を犠牲者のためにこの村に立てたい、という。

◆旅を終えて

今回は、多くのことを改めて考えさせられる機会となった。それは、私たちのNGOの大先輩でもある草地賢一さんの「たましい」が、今でもこの村の人々の中に息づいていること、そして、そこから彼ら自身が自分たちで立ち上がろうとしていること、そんな人々を目の前にして、自分が本当に出

来ることは何なのか。そういうことなどを考えさせられる機会になった。

今まで災害救援という枠組みで活動をしてきたが、9.11以降の世界が「変わった」のではなく、世界にある様々な問題が「露呈」したことを、彼らの対話の中からも感じることができた。それは、パプアニューギニアの隣に位置するインドネシアのイリアンジャヤの歴史を見ても明らかだす。

草地さんに教えられた「当事者の人々と向き合って、解決策を見出していく」ことを、これから多くの現場で実践ていきたいと思う。



現地の子どもたち（鈴木隆太撮影）

CODE 海外災害援助市民センター セミナーのお知らせ INFORMATION

私たちCODEは1月17日で、発足より1年を迎えました。今年度は、具体的な救援プログラムは、6月に発生したイラン地震救援と7月にプロジェクトチームを発足したアフガニスタン救援のみに留まりました。

通常の活動として、セミナーを主に開催してきました。前号でも紹介した「NGOことはじめ」セミナーは、下半期もテーマを「～KOBE発世界へ～」と変えて開催中です。既にみなさんご存じの通り、被災地KOBEのNGO/NPO団体の多くは、震災を契機に発足しています。その中核を担う多くの方々が、NGO/NPOの世界とは無縁の中で、震災以降、この世界に入ってきた人が多いです。またCODEの原点でもある被災地KOBEの「草の根の活動」を通じ、現在は海外災害救援のご経験もある方々を講師としてお迎えして、「NGOの果たす役割、活動の現状」や「国際協力の現状、課題は？」さらには「私たちにできることは？」ということを参加者とともに考えていく講座です。

また、これまでセミナーにご参加いただいた方のご意見の中で、実際に現地の話を聞きたいという声が多くありました。そこで、下半期より「私が描く地球のくらし方！～知って楽しい〇〇編～」と題したセミナーも開催して

あります。KOBEには在日外国人が多いということもあり今まで中国編とトルコ編を開催してきました。前半は、講師の方がプロフィールを交え日本に来た理由や日本の生活で困ったことやその国の歴史、文化や生活習慣などについてお話ししていただき、後半は、参加者の方と質疑応答を交えざくばらんに交流していただきます。現在の世界情勢を在日外国人として、個人的な見解としながらも冷静に時には大胆にご意見を述べられ、参加されたそれぞれの方が、違った角度から世界情勢を考える良い機会となっている事と思います。

来年度も上記2つのセミナーは開催していく予定です。情報は、随時CODEホームページ (<http://www.code-jp.org/>) に掲載していくので、ご覧下さい。（仲江川徹）

◆今後のラインナップ

NGOことはじめ～KOBE発世界へ～

第4回「KOBE発世界へ～支え合いは国境を越えて～」

3月15日（土）14時～16時

神戸YMCA316号教室（参加無料）

村井雅清さん（被災地NGO協働センター代表）

私が描く！地球のくらし方

第3回～知って楽しいインド編～

3月7日（金）18時30分～20時30分

神戸YMCA教室（参加無料）

ラジブ・ショウさん（UNCRD兵庫防災計画事務所）

世界をめぐれ！ 被災地発、平和のメッセージ

NO MORE WAR!

イラク情勢が緊迫する中、世界的に市民の「NO MORE WAR」の声が高まっている。国家が政治的に戦争の道を選ぶなら、市民の力でそれを食い止めようと言う動きである。大きなうねりは、昨年の「9.11」一周年を過ぎた頃から世界各地でおこりだし、イギリス、アメリカ、イタリアなど文字どおり世界規模で行われている。9.28にロンドンで行われたイラク攻撃反対デモ（「STOP戦争連合」と英国イスラム教会の共同呼びかけ）は40万人が参加した。同日ローマでは、「再建共産党」の呼びかけで、10万人が反戦デモをしている。全米の市民団体連合「ANSWER（開戦を食い止め、人種差別を終わらせるため、いま行動を）」が呼びかけ、10.26にワシントン、サンフランシスコ等で開いた集会には数10万人が集まった。11月の欧州社会フォーラムでは、フィレンツェ100万人デモを成功させ、全ヨーロッパ統一行動への道を開いた。

2003年を迎えてからも、平和を目指した更なる動きが国際共同行動として行われている。1.18に米国のANSWERが呼びかけた反戦集会は、全米70万人をはじめ世界38カ国以上で展開された。英国のSTOP戦争連合などヨーロッパ11カ国の反戦団体が呼びかけた2.15の国際共同行動には米国のANSWER等も呼応し、世界中の400以上の都市で1000万人が参加した。

私たち被災地NGO協働センターも世界の動きに連動して、1.18には「反戦市民投票」を呼びかけ（共同呼びかけ：神戸ラブ&ピース、神戸YMCA、ピースの会、ネットワーク地球村神戸）、ANSWERの戦争反対国民投票への賛同署名（6,268人）と日本政府宛の反戦署名（10,578人）を集めた。また2.15には「KOBE発1千万人のピースウォーク」を行った（主催：KOBEピースネット）。

詳しくは右の新聞記事と、下記URLをご覧下さい。

<http://www.kcc.zaq.ne.jp/lovepeace/>

また、国際法に照らしてアフガニスタンにおけるアメリカの戦争犯罪を告発し、国際的な市民の協力で戦争の真実を明らかにしていく「アフガニスタン国際戦犯民衆法廷」という取り組みが昨年10月に発足した。12.15の東京公聴会を皮切りに全国各地で公聴会を開催し証言を集め、2003年12月に東京で結審しようという取り組みである。

1.19に第2回公聴会が大阪で、1.22には渋谷で第3回公聴会が開かれ、第4回目は神戸で2.23に開催される。兵庫公聴会では、アフガニスタン民衆への被害を女性・子どもに焦点を当てて明らかにし、国際法の観点からも証言される。被災地NGO協働センターからも、数名が実行委員会に参加している。詳しくは<http://afghan-tribunal.3005.net/>をご覧下さい。

（被災地NGO協働センター 細川裕子）

2003年(平成15年) 2月16日 日曜日

未申

戸

葉斤

被災地からアクションを

神戸でのピースウォーク。世界各地の反戦の訴えに、被災地の声が呼応した=15日午後、神戸市中央区



神戸市内では、平和運動を取り組む団体のネットワーク「KOBEビーストネット」が三宮センター街などを歩行進年船

や国境を超えて約百二十人が「爆弾でなく愛を」などを記したプラカード

や風船を持ち、歌いながら歩いた。

会社員の高鶴友子さんは「アフガニスタンの花束を手に「テレビの前で文句を言つても何も始まらない」と思つて」十六

日にイラクに向かうNPOスタッフの吉村誠司さんとは、「神戸には、彼を、テレビで見ていくく

が、彼たちが殺される光景を、子供たちが殺される光景

で抗議の意思表示をし

た。ボスニア人の夫と一緒に集会、シュプレヒコールで抗議の意思表示をし

た。神奈川県相模原市から来たアルギッチャ加奈子さん

は、「イラク攻撃には、子供たちが殺される光景を見たがっている。それ

をやめさせるのは民衆の力しかない」とあいさつ

した。

イラク攻撃 世界で「反対」

イラク攻撃反対の国際的な統一行動日の十五日、反戦と平和を求める事が、世界の六百近くの街で響いた「人の痛みに共感できる大震災の被災地からアクションを」と、神戸でのピースウォーク。米軍基地を抱える沖縄では、参加者が英文のビラを米兵に手渡した。歌う、ツルを折る、花束を手に歩く。「私たちの力で戦争を止めよう」。訴えは国際政治を動かすか。

（1面参照）

神戸は120人行進

「他人の痛みでできる」

分のしていることが最も危険な「テロ」などとブッシュ米大統領にあたたメセジを書き込み、抗議とともに大使館職員に手渡した。

英米両国が準備を進めているイラク攻撃に反対するデモ行進が十五日、英国内閣総理大臣のロンドン中心部で行われた。参加者は約五十万

人に上り、同国史上最大規模。市民らは「戦争反対」などと訴えながら市内を練り歩いた。各地から集まつた市民たちに伝えた」と、寄せられた。

神戸県沖縄市では、市民約百人が米国などから準備を進めるイラク攻撃に反対する集会を開き、約一時間かけて市内をデモ行進した。市民団体「平和運動進める市民団体「平和市民連絡会」の主催

の江藤千尋さん（三）は「政権が行わるたら多くの市民が犠牲になるわけで、絶対に回避しなければならない。ブレア首相は國民の声に耳を傾けるべきだ」と話した。（時事）

ロンドン

ぞう 通信。

第27号 2003. 2. 18

発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel:078-511-8698 fax:078-574-0701 http://www.pure.ne.jp/~ngo/



つなぐ愛・結ぶひと



梅の花が咲き、春の訪れを感じる今日この頃、みなさまお元気でお過ごしでしょうか？世界ではイラク戦争が叫ばれ、アフガニスタンやパレスチナなど紛争が絶えず、春はまだ遠いようです。でもきっと春がくると信じて、私たちにできる身近な行動からはじめています。

先日、以前からKOBEや「まけないぞう」の支援をして下さっている高校にお邪魔してきました。高校一年生がそれぞれ興味があるテーマごとにグループに分かれて、発表するのです。私が参加したのは、子どもと地球のハンドメイド大賞でした。これは、子ども・地球・未来をテーマに伝えたいことを見つけ、それを造形にするというものでした。

一つのグループはいろんなことの結果が最後には平和に行き着くことを表現していました。これは例えば、水をめぐって争いが起きたり、子ども達の笑顔を作るためには平和を築くことが大切だったりというものです。また、別のグループは環境や人権問題に対して、本当の意味で幸せ、平和が来るためには、愛が必要だと。武器がなくなれば戦争はなくなる、水も大切だし、土も大切、様々な問題に対して、愛が必要と訴えていました。そして、もっとも大切なのは「今この問題と向き合うこと」だと。もう一つのグループは、思いやりと夢が大切だと。また、今もし大陸がつながっていたら、人々はすぐに会うことができ、仲良くなれるのに、そのためにも、自分が身近にできる、コンビニなどで募金することから始めたという子もいました。それそれに感じたことを絵に描いたり、詩を作ったり、物をつくったりして、表現していました。土が大切だと感じた子は、海・山・川の土を水槽みたいなものに入れ、種を植え、芽をだしていました。

また、ある子はもしアパートに環境問題が住み着いたらということで、アパートの模型の中に、大気汚染、ゴミ問題、酸性雨などを表現したものを作っていました。

私たち大人は、この純粋な子ども達の夢や希望を叶えるように豊かな社会を築いていかなければと思いました。私たちはひとつ、この「まけないぞう」を通して、たくさんの方々の想いや人をつないできました。KOBEの人たちのために何かしたい、でも何をしたらいいのかわからない。そこへ、たった「一本のタオル」送ることで被災地の支援になると、子どもからお年寄りまで参加してくれています。今では、KOBEもみなさん支えてもらつたお礼にと、国内の水害地へタオルの一部を送つたり、同じ痛みを共感できると言うことで「まけないぞう」を送っています。

そして、世界の被災地へも「まけないぞう」を送っています。KOBEの被災者の人たちが、こんな遠くまで思いやりを届けてくれたと、とても喜んでくれています。作り手である、被災者の人たちも、「やっとみんなに恩返しができる」と針を運ぶ手に力が入ります。KOBEの経験が、「まけないぞう」がいろんな愛の形となって、人々に元気や勇気を運び、支え合いの社会をつくるきっかけになってくれれば幸いです。6433名の尊い命を失い、その命を無駄にしないためにも……

LOVE

広がれ！！
まけないぞうの輪

支援者からの
メッセージ

去年夏の栃木の豪雨水害で被災に遭われた方たちへ「まけないぞう」をプレゼントしました。そのお礼のお手紙を紹介いたします！

被災者の方の
つぶやき……

ほんま今の住宅は、淋しいわ、一端家に入ってしまうと、誰一人会わないし、何の物音も聞こえへん。隣に人が住んでいるかもわからへん。仮設の時は、みんないたし、なんやかんやといろいろ人が来てくれたからとても楽しかったわ……あの頃はよかつたなあ。

この夏の水害に、「まけないぞう」を頂きました。有り難うございました。すぐに返事をとダンボール箱に向かいますが、こみあげて涙でペンを取りることができないまま、半年が過ぎてしまい申し訳ございません。

今はテーブルも揃い、年の終わりに手紙を書かなくて年を越せないと立ちました。秋には雨が降れば眠れず、深夜3時半頃水害にあいましたので、夜が恐い状態で、記憶も真っ白な部分もあって、現在引っ越しましたが心は今だに不安定です。体調もストレスがあると、すぐに悪化します。

時間をかけて、ゆっくり直してゆきたいと思います。何もかも失った中で、3人の子どものアルバムが泥で失ったのが1番つらいです。

でも沢山の方に支えられて、笑顔を取り戻しました。

これからはできる限り、回りの方に返してゆくよう心がけていきます。

寒くなりましたが、「まけないぞう」事業部の皆様も風邪など召しませぬようお気を付けて下さい。少しですがタオルを送ります。

from 「まけないぞう」
with LOVE……

一本のタオル運動にご協力下さい

出版予告！ 3月発行

市民が変える 明石のまち

「市民の行政」を取り戻すために

松本 誠著

A5判ブックレット版 本体 500円 文理閣刊



明石市はよみがえるか？

花火大会事故と砂浜陥没事故で露呈した、明石市の課題とは何か。高度経済成長に乗って大切なものを見失い、市民の手から遠くなつた明石市のまちづくり。本書は、長年にわたつて多くの市民とともに地域の課題に挑み続けた筆者から、「市民が主役となる明石」へよみがえるための道筋を提起したメッセージである。分権時代の最先端をめざして、新しい「自治の姿」を構想する手引き書でもある。

元・逗子市長、龍谷大学教授 富野暉一郎

さあ窓を開けて、新しい時代の風を明石のまちに入れよう

この本に綴られた松本さんの文章は切れがよくて実にわかりやすい。一言でいえば、流麗なのである。だが、それだけではない。何よりも読者に訴えようとする熱い気持ちが伝わってくる。それは伝えようとすること全てを自分の眼と足で発掘して、自分の言葉で語っているからだ。その背景には、長い記者生活の中で培われた練達のセンスと13年間にわたる「まち研明石」の地道な実践活動がある。そして何よりも明石を愛する熱い心がある。

龍谷大学法学部教授、前京都府立大学長 広原 盛明

【目次】

- 第1章 大蔵海岸花火大会事件の衝撃 何が起こったのか/事件の背後にあるもの/教訓は生かされたのか/
- 第2章 市民参加の虚実 広がりと深まりを見せる市民参加/市民活動との協働と行政改革/ほか
- 第3章 住み良いまちへ向けて 住み良さ指標から見えたこと/明石のまちの問題点/ほか
- 第4章 市政を市民の手に 市民と市政の連携を強める/市民と議会、行政は“三輪車”/ほか

文理閣 京都市下京区七条河原町西南角 TEL (075) 351-7553 FAX (075) 351-7560

『市民が変える明石のまち』

冊 申し込みます

住所

氏名

TEL

FAX

CODE Kick Off 連続セミナーブックレットのご案内

この度、2002年に開講した Kick Off セミナーの
ブックレット(全 6 冊)を作成しました!

それぞれ、A5 版で価格は 300 円です。ご購入希望
の方は、CODE 事務局までお問い合わせ下さい。
(TEL:078-574-7744)



ブックレット No.1 (A5 版 33 ページ)

「CODE の理念」

芹田 健太郎 CODE 代表
神戸大学大学院国際協力研究科教授

CODE 代表の芹田健太郎神戸大学大学院教授。最初
の 1 時間は「CODE の理念」というテーマで、NGO の歴
史や人権、「最後の一人まで」という神戸宣言以来の
救援活動に対する考え方を幅広く語られた。

ブックレット No.2 (A5 版 31 ページ)

「海外の緊急支援における

ジャパン・プラットホーム」

井手 勉 ジャパン・プラットホーム事務局長

2001 年より活動を開始したジャパン・プラットフ
ォームの発足の経緯、実際の資金支出や活動のしく
み、評価や今後の課題などについて語られた。

ブックレット No.3 (A5 版 36 ページ)

「JICA 青年海外協力隊 OG の海外災害救援」

安藤 二葉 JICE 研修監理員

ご自身の海外での救援活動に実際に参加した経験
から、JICA や赤十字の緊急救援の問題点や課題、ま
た国際災害援助の今後の取り組み方と課題について
語られた。

ブックレット No.4 (A5 版 25 ページ)

「災害後のコミュニティ復興及び防災」

室崎 益輝 CODE 副代表
神戸大学都市安全研究センター教授

KOBE の震災後の取り組みに焦点を当てながら、震
災後の被災地の活動に学ぶことや、伝えることの大
切さなどを語られた。

ブックレット No.5 (A5 版 31 ページ)

「人と防災未来センター構想」

河田 恵昭 CODE 顧問
人と防災未来センター長

「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」として建設計画
が進められてきた同センターの概要や運営方針について
を柱に、博物館・研究機関・人材育成など、同センターの
担う役割の全体像について語られた。

ブックレット No.6 (A5 版 26 ページ)

「YMCA と災害救援・難民救済、及び 緊急救援に関わる現状と今後の課題」

宮崎 幸雄 元世界 YMCA 同盟難民事業部長

ご自身の YMCA での活動の経験から、今後の NGO
のあり方について「linking」をキーワードに語られ
た。

CODEブックレット購入申込書

Fax:078-576-3693

海外災害援助市民センター(CODE)事務局宛

TEL:078-578-7744 e-mail:info@code-jp.org

ブックレット No. _____ を購入します。

お名前 _____

ご住所 〒 _____

Tel _____ Fax _____

e-mail _____